

また、海上すれすれを飛ぶことから、海水を撒きちらしているとしている。深浦の漁師から確認したのであろう。

「宇頭安方伝説」についても明解な解説を試みている。「安方」という固有名詞が、善知鳥神社の所在地である安潟からきたものとし、善知鳥神社の所在地であったところに潟があり、そこに「やすの木」があったので、その潟が「安潟」と呼ばれていたと結論している。

真澄は土地の古老の案内で現地を訪ねて確認したのであった。この地名が都の人宇頭大納言安方からきたという俗論を否定している。「宇頭安方伝説」は「うとう」「やす潟」という地名に「うとう」（つなぎ）という鳥の習性を組み合わせた話であることを解明したのである。真澄はその土地に関係なく、都の人たちによって作り上げられた話を納得できなかつたに違いない。

真澄は謡曲「善知鳥」についてはいっさい語っていない。この謡曲を知らなかったはずはない。真澄は《外が浜風》の中に「紅のなみだの雨にぬれしとてみのをきてとるうとうやすかた」という和歌を紹介している。「うとう」が海上すれすれを飛ぶ習性から海水が常に羽根を濡らしており、これを「うとうの血の涙」とした話を知っていたのである。しかし、「うとう」の本当の習性を知っていた真澄にとって、都人のつくった話を記す必要を感じなかつたに違いない。

真澄は、文政7年（1824）冬、八沢木村（秋田県大森町）を訪ね、《雪の出羽路平鹿郡》五巻の中で「鵜飛田」について次のように記している。

『郡邑記に、善知鳥蓋家数五軒、亀田領由利郡矢島領の内雑魚又という所が境であり、御領は大台一本木より山嶺続き水落次第とある。その頃も五戸、今も五戸である。善知鳥蓋は不思議な名であるが、仙北郡千屋の枝郷に善知鳥村（秋田県千畑町）があり、また、河辺郡の平尾鳥の枝郷にも善知鳥村（秋田県雄和町）がある。また、踏めばしとしと鳴る坂があり、そこを善知鳥坂といって所々にあり、そこは空虚の土地である。外が浜の善知鳥も、今は松前の海にだけ住む小鴨のよう

な鳥である。この鳥は松前の小島（北海道松前町）の穴に住むので小嶋鳥と呼び、土に穴を掘って巣としている。空虚鳥という所以である。うと鳥ということのをうとうどりというのである。これはここでは関係のない長物語であるが、まだ良く知らない人のために、あえて書いたのである。いま又、この村の名を鵜飛田の文字に改めたのは大変良いことである。』

真澄は善知鳥という地名と鳥の善知鳥の正しい語源を述べ、『郡邑記』（六郡郡邑記、享保郡邑記ともいう、享保十四年＝1729年成立、岡見知愛編といわれるが異説もある）の時代「善知鳥蓋」と呼ばれていた土地が、約百年後の文政八年（1825）には「鵜飛田蓋」と書かれていたのであった。真澄は「此村名を鵜飛田の字に作なしたるはいとよし」と結んだのである。真澄は実態と関係のない「善知鳥」という文字に我慢ができなかつたのである。今、再び「善知鳥蓋」と昔に戻ってしまったのが残念である。

真澄は都の文人たちが作り上げた伝説や謡曲によって作られた、一見美しい「善知鳥」という言葉と文字よりもその土地に根差した「空虚坂」と「鳥」こそ正しい用語と信じていたのである。

1999年田口昌樹著「管江真澄」読本3・考

## うらおおまち【浦大町】

### \*うらおおまち\*

菅江真澄が『秋田のかりね』に「市立つことを町とはいう也」と記したように、町村（馬場目村町村）とは「市の立つ村」という意味の地名なのだ。

1989年 山川出版 新版秋田県の歴史散歩

### \*うらおおまち\*

後背山地、高岳山（標高121.4m）の南麓に位置し、かつての海岸沿の所である。「ウラ」は湾、入り江を意味する地名で、霞ヶ浦、男鹿北浦、浦賀水道、日高浦河町、千葉勝浦、富浦、袖ヶ浦など数多い。

浦城跡は高岳山の中腹台地にあつて、城主 三